les classes sociales en France au XVIIIe siècle (1924) では、所謂舊制末期のフランスの農業資本主義化の運動(第一部)と經濟的事象の社會的階級變化への影響」を考察し、L'évolution commerciale et industrielle de la France sous l'ancien régime (1925) では、「從來の舊制末期の商工業に關する特殊研究を綜合せんと試み」、La France économique et sociale au XVIIIe siècle. (1925) なる小册子では、大革命前の農民・貴族・僧侶・大小ブルジョワージの社會・經濟史的な究明を非常に平易に明晰になし、同種の叢書の Les origines du capitalisme moderne(1926)では、西歐の近世資本主義の起源より十九世紀に至るまでを諸家の研究を比較・綜合し、又 Esquisse d'une histoire economique et sociale de la France depuis les origines jusqu'a la guerre mondiale (1929) は、從來の自己の研究の結果、他の特殊的研究等を綜合して、恐らくフランスで最も纒つた社會經濟史と考へられてゐる。尙獨逸語で出版されたFranzösische Wirtschaftsgeschichte 2 Bde. (1930—1935) も同樣のものと思はれる。

教授の研究は更に政治思想史・史學理論にまで及んで居り、「十七・十八世紀のフランスの政治思想」に關するもの、又、唯物史觀、歷史哲學等に對する見解も二、三の著書として刊行せられてゐる。これらの著述の外、或は A. Young の旅行記の完譯や、最近では叢書 Clio にも盡力(本誌前號參照)するなど、或は根本史料の刊行に與る等、Revue historique, Annales d'histoire économique et sociale その他への無數の論文と共に、フランス史學界に甚大の寄與をなしたのである。而も、これらの研究が、晩年十數年間のもの多きを思へば、我々は教授の撓まざる研究心に敬服せざるを得ない。

その歷史理論・比較方法等には幾多の批判の餘地があるにしろ、教授の明晰な、流麗な文章は、豐富な參考書誌と共に、フランス經濟史を研究するものに、非常な親しみを感じさせる。事實教授は各地よりの訪問者を歡待し、特に若き人々の教導に努力を惜しまなかつたと云はれてゐる。遠き見知らぬ異邦の一學徒の問に對してゞも懇切に返答を賜つた教授にこの一文を弔辭として捧ぐることを許して頂きたい。〔前川〕

○經濟地理學要義

田中秀作
田中博共著

輓近我國經濟界の發展は經濟地理的知識の必要を喚起し、經濟地理に關する論文、著書の公にされるもの應接に暇なき程である。雜誌「地理と經濟」又經濟地理學叢書の如きは到る處の書店に陳列されてゐる。それ等を瞥見すると執筆者は專門の經濟學者、地理學者よりも寧ろ個々の產業部門の技術者、實際家が多く、經濟地理學が甚だ若く活氣に充てる學問である事を感ずるが、又之等の中には單に流行に從つて何々地理と稱するだけで、內容は統計を羅列したに留まつて眞の經濟地理學には尙遠いものである事を遺憾に思ふ。この時に當つて、本學出身の地理學者にして長らく彥根高商、神戸高商に於て經濟地理學を研究教授され來つた兩學士

が上梓された本書は經濟地理學界は勿論一般好學者を稗益する所少くないであらう。全篇を六章に分ち第一章に於ては經濟地理學の本質と職能を論ず。先づ斯學の發達を地理學、經濟學、實用の三方面より綜括し、その本質職能に就いては現代諸大家の見解を並記してゐるが、經濟地理學は地表に分布する經濟的文化現象を自然環境と經濟人との間に行はるゝ相互作用の原理に基き、地域的に因果的に研究する文化科學であるとなしてゐる。第二章は經濟地域論で主としてディートリッヒに從つて諸種の地域設定法を述べたる後國家又その聯合である經濟ブロックの如き政治的區劃によるを最も便宜であるとされる。第三章の生產地理は立地に關する諸問題を解說したる後農、林、牧、水產、鑛、工の各部門に亙つて要領よく概說されてゐる。第四章は商業地理で最も多くの頁を之に費され、貿易の諸問題を經濟地理の立場から明快に論述された。第五章は交通地理で陸上、水上、空中の交通、港灣等が論ぜられ、第六章は人口の分布と移動に就き、人口地理、聚落地理、植民地理的考察がなされてゐる。この最後の節は植民發向の型をフェニシア・ギリシア型、ローマ型、ゲルマニヤ型、モンゴール・タタール型、シナ型、ニッポン型に分類して述べたもので最も獨創に富んでゐる。

著者は序文に、本書は現代の經濟地理學に於ける中庸なる學說を平易に紹介したに過ぎないと謙遜されてゐるが、各所に著者の識見や蘊蓄のひらめきが感ぜられる。行文平易、明快、活字の大きさ、圖版の組み方何れも適當で氣持がよい。(菊判二四三頁、定價二二〇錢、地人書館發行)(米倉)

彙報

○京都帝國大學文學部史學科本年度講義題目

正科目

國史

普通　西田教授　國史概說(第一部)　二
　　中村(直)助教授　國史概說(第二部)　二
特殊　西田教授　日本近世文化史料研究(實習)　二
　　藤助教授　武家社會の研究　中世史料の研究　二
　　喜田講師　日本先住民族の研究　二
　　魚澄講師　室町幕府と諸豪族　二
　　三品講師　朝鮮通史　二
　　出雲路講師　有職故實　二
演習　西田教授　日本思想史の研究　二

東洋史

普通　羽田教授　東洋史概說(第一部)　二
　　那波助教授　東洋史概說(第二部)　二
特殊　羽田教授　東方に於ける胡人の活動　二
　　那波助教授　唐代に行はれたる外國風俗　二